

住民説明会要旨

- 1 説明会 エネルギー回収型一般廃棄物処理施設・新最終処分場住民説明会
- 2 開催日時 令和3年6月26日（土）午後6時30分から午後7時30分まで
- 3 開催場所 川崎市民センター
- 4 参加者 10人
- 5 事務局

石川隆明副管理者、村上秀昭事務局長、小野寺啓総務管理課長、千葉晃一関清掃センター所長、菅原彰大東清掃センター所長、吉田健総務管理課施設整備係長、石川勝志総務管理課主任主事、一般財団法人日本環境衛生センター5名（以下、日環センター）

6 説明

- (1) これまでの説明会の概要について
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について
- (3) 新処理施設の事業方式（案）について
- (4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について
- (5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について
- (6) 今後の予定について
- (7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

7 あいさつ

これまで組合では、エネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場の施設整備に関し、一関市と平泉町の住民の皆様を対象とした住民説明会を令和元年12月から昨年11月にかけて4回40会場で開催してきた。今回は5回目の説明会となる。

本日は組合が検討を進めているエネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場について、これまでの住民説明会の概要や、検討してきた施設の内容、今後の予定などについて説明するほか、一般財団法人日本環境衛生センターから日本のごみ処理について情報提供する。

皆様には、不安に思っていることや疑問など、些細なことでも構わないので、率直なご質問やご意見を願います。

8 説明内容

- (1) これまでの説明会の概要について
第1回から第4回の住民説明会の概要について事務局より説明を行った。
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について

焼却方式は、ストーカ炉を採用する案としたことについて事務局より説明を行った。

(3) 新処理施設の事業方式（案）について

P F I 導入可能性調査を実施した上で、最も適切な事業方式を選定することについて事務局より説明を行った。

(4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について

漏水箇所の特定期間が高いことなどから、電気式検知法の採用を検討することとしたことについて事務局より説明を行った。

(5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について

雨水などの内部貯留が生じないことを原則とし、過去30年間の降水量データなどを基に、調整槽と水処理施設の設定した規模の組合せで水収支計算を行い、両施設が合理的な規模関係が得られるところでそれぞれの規模を設定する案としたことについて事務局より説明を行った。

(6) 今後の予定について

事務局より説明を行った。

(7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

日環センターより情報提供を行った。

9 質疑応答

参加者 今の説明では最新の焼却炉というものが大変よく説明されていたが、鉛、ヒ素、水銀、六価クロム等が入っていたらこの焼却炉でどうにかなるか。

事務局 元素を消滅させるのは不可能と理解しないといけないが、それが環境中に放出されて問題を起すか否かが課題となる。焼却炉はダイオキシン類対策の関係から法律では800℃以上で焼却となっている。新ガイドラインでは850℃以上とされている。ダイオキシン類対策としてこれは良いが、お話しのあった鉛、ヒ素、水銀、亜鉛といった低融点の金属は、高温で燃やすと燃焼ガス側に移行してフライアッシュになる。ダイオキシン類対策ではボイラーで冷やした後、200℃程度に排ガスを冷やすことになるため、排ガス側に移行した金属類はかなりがばいじんになる。かなりと申し上げたのは、水銀については排ガス中の塩素と化合して塩化水銀という塩になる。水銀自体はかなり低融点でもガス状にあるが、大部分の水銀も塩という形で固体化してバグフィルタで除去される。水銀については大気汚染防止法により新たな規制物質ということで規制されて、今の焼却施設についても排ガスの温度管理をすることによってバグフィルタで99%以上といったレベルで除去される。お話しのあった点はそのようにご理解いただければと思う。

参加者 最終処分場について、今の予定はオープン型ということだが、焼却炉でとれな

い鉛、水銀、ヒ素、熱処理によってできる六価クロムといったものは、最終処分場に入っていくということを考えないといけないと思う。従って、最終処分場から雨や風で飛んでいくといったことでは困る。国内のいろいろな施設を見て回ったが、ほとんどの処分場はオープン型であるが、処分場には今言ったようにいろいろな重金属などが入っており、無くなるということはない。こういったものが処分場から流れ出したり、風で飛ばされたりするという事は非常に危険である。その点をどう考えているか教えてほしい。

事務局 先ほど焼却施設での低融点の重金属についての話をさせていただいた。鉛、カドミウム、亜鉛、水銀を含んだばいじんは、環境省の告示があり、集塵機で集めたばいじんをそのまま埋めるということではない。環境省が定めた処理を行い安定化した上で最終処分場に持っていくということになっている。方法はいくつかあるが、今、比較的一般的に行われている方法は、キレートという薬剤を注入し、固形化して雨が降ってもそれが溶け出さないような処理を処理施設で行い、最終処分場に持ち込むという方法であることを補足させていただく。

最終処分場の中に入ったものが、ずっとそこにあるということが心配というように思うが、そこにあるものが、溶けださないような形でそこに留まるようにすることが対策の基本的な考え方である。廃止後にその土地を改変するという可能性もあるが、今の法律では最終処分場の跡地は指定区域に位置づけられ、簡単に掘ったり建てたりできない。きちんと対策を取ったうえでやることになる。風が吹いて飛散するという事もないように、覆土も十分にかけて管理することになる。

参加者 最終処分場の勾配は1対1や1対1.5や1対2など、そういった形づくり、そこにシートを張っていくと思う。そのシートは地震に対する強度計算ができるか。

事務局 今の話は盛土の勾配のことと思うが、通常時と地震時の安定計算をする。そのときにはシートはない状態で解析をする。シートがある状態のほうが崩れにくいのではないかと思われるかもしれないが、そういうことはない。実際にはシートの有り無しに関係なく下の状態の土の性状、地下の状態で解析して十分対応する。安全率も1.2以上などの決められた係数があるので、それらを基に安全を確認したうえで設計することになる。

住民説明会要旨

- 1 説明会 エネルギー回収型一般廃棄物処理施設・新最終処分場住民説明会
- 2 開催日時 令和3年6月28日（月）午後6時30分から午後7時20分まで
- 3 開催場所 平泉町役場
- 4 参加者 11人
- 5 事務局

青木幸保副管理者、石川隆明副管理者、村上秀昭事務局長、小野寺啓総務管理課長、千葉晃一関清掃センター所長、菅原彰大東清掃センター所長、吉田健総務管理課施設整備係長、石川勝志総務管理課主任主事、一般財団法人日本環境衛生センター5名（以下、日環センター）

6 説明

- (1) これまでの説明会の概要について
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について
- (3) 新処理施設の事業方式（案）について
- (4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について
- (5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について
- (6) 今後の予定について
- (7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

7 あいさつ

これまで組合では、エネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場の施設整備に関し、一関市と平泉町の住民の皆様を対象とした住民説明会を令和元年12月から昨年11月にかけて4回40会場で開催してきた。今回は5回目の説明会となる。

本日は組合が検討を進めているエネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場について、これまでの住民説明会の概要や、検討してきた施設の内容、今後の予定などについて説明するほか、一般財団法人日本環境衛生センターから日本のごみ処理について情報提供する。

皆様には、不安に思っていることや疑問など、些細なことでも構わないので、率直なご質問やご意見を願います。

8 説明内容

- (1) これまでの説明会の概要について
第1回から第4回の住民説明会の概要について事務局より説明を行った。
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について

焼却方式は、ストーカ炉を採用する案としたことについて事務局より説明を行った。

(3) 新処理施設の事業方式（案）について

P F I 導入可能性調査を実施した上で、最も適切な事業方式を選定することについて事務局より説明を行った。

(4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について

漏水箇所の特定期間が高いことなどから、電気式検知法の採用を検討することとしたことについて事務局より説明を行った。

(5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について

雨水などの内部貯留が生じないことを原則とし、過去30年間の降水量データなどを基に、調整槽と水処理施設の設定した規模の組合せで水収支計算を行い、両施設が合理的な規模関係が得られるところでそれぞれの規模を設定する案としたことについて事務局より説明を行った。

(6) 今後の予定について

事務局より説明を行った。

(7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

日環センターより情報提供を行った。

9 質疑応答

なし

10 担当課 総務管理課

住民説明会要旨

- 1 説明会 エネルギー回収型一般廃棄物処理施設・新最終処分場住民説明会
- 2 開催日時 令和3年6月29日（火）午後6時30分から午後7時30分まで
- 3 開催場所 一関市産業教養文化体育施設アイドーム
- 4 参加者 9人
- 5 事務局

石川隆明副管理者、村上秀昭事務局長、小野寺啓総務管理課長、千葉晃一関清掃センター所長、菅原彰大東清掃センター所長、吉田健総務管理課施設整備係長、石川勝志総務管理課主任主事、一般財団法人日本環境衛生センター5名（以下、日環センター）

6 説明

- (1) これまでの説明会の概要について
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について
- (3) 新処理施設の事業方式（案）について
- (4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について
- (5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について
- (6) 今後の予定について
- (7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

7 あいさつ

これまで組合では、エネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場の施設整備に関し、一関市と平泉町の住民の皆様を対象とした住民説明会を令和元年12月から昨年11月にかけて4回40会場で開催してきた。今回は5回目の説明会となる。

本日は組合が検討を進めているエネルギー回収型一般廃棄物処理施設と新最終処分場について、これまでの住民説明会の概要や、検討してきた施設の内容、今後の予定などについて説明するほか、一般財団法人日本環境衛生センターから日本のごみ処理について情報提供する。

皆様には、不安に思っていることや疑問など、些細なことでも構わないので、率直なご質問やご意見をお願いします。

8 説明内容

- (1) これまでの説明会の概要について
第1回から第4回の住民説明会の概要について事務局より説明を行った。
- (2) 新処理施設の焼却方式（案）について

焼却方式は、ストーカ炉を採用する案としたことについて事務局より説明を行った。

(3) 新処理施設の事業方式（案）について

P F I 導入可能性調査を実施した上で、最も適切な事業方式を選定することについて事務局より説明を行った。

(4) 新最終処分場の漏水検知システムの導入（案）について

漏水箇所の特定期間が高いことなどから、電気式検知法の採用を検討することとしたことについて事務局より説明を行った。

(5) 新最終処分場の浸出水処理施設の規模の考え方（案）について

雨水などの内部貯留が生じないことを原則とし、過去30年間の降水量データなどを基に、調整槽と水処理施設の設定した規模の組合せで水収支計算を行い、両施設が合理的な規模関係が得られるところでそれぞれの規模を設定する案としたことについて事務局より説明を行った。

(6) 今後の予定について

事務局より説明を行った。

(7) 情報提供「日本のごみ処理～世界のごみ処理との比較～」

日環センターより情報提供を行った。

9 質疑応答

参加者 処理施設の基本設計が今年度中に完了するスケジュールになっている。ストーカ炉を選定するなどの点については、妥当な考えと思うが、従来から話をしている全量焼却にこだわらずということについても、この基本設計の中で取り上げられるのか。

事務局 処理方式は、焼却方式という案で説明をさせていただいた。その際に、それに加えて堆肥化などの資源化率の高い処理方式を付加的に導入できないか検討するとしている。基本計画は今年度中に策定するので、その中で付加的な部分も検討させていただくが、今の時点では、まだ議論できていない状況である。

参加者 基本設計の段階で全量焼却のケースと生ごみを違う形で処理したケースとで、しっかりとエネルギー収支やCO₂の排出割合、あるいは建設コストも含めて提出していただきたいという趣旨である。

参加者 最終処分場の浸出水については、必要な処理をするということは当然のことだが、最新の知見によれば、最終処分場の処理水の中にも残留性有機汚染物質が含まれており、それを問題にせざるを得ないという知見があるようなので、よく調べていただいたうえで、対処の仕方を教えていただきたいと思う。

事務局 施設の整備計画を策定している最中であり、今いただいた意見も反映させなが

ら検討を進めていきたいと思う。これからもいろいろ情報提供いただければ幸いである。

10 担当課 総務管理課